語林類葉

た

四

ホ 2
502
4

門 102
部 102
巻 4

宮城県図書館

語林類葉巻之四

清水濱臣輯

おの部

二言

おす 夫木六 寒葵

ふるのみやしろのあたりをおすまでに後の色をいろみちにけり

おち おい。墮落

古今 清正

名にめでてこしをまちえたるかりそめを風にしたがひてちにきそ人のつるかな

後拾遺 雜四 法師の扇をかりて侍りけるとこたへて 和泉式部

あふぎ水ちりぬるかりとしらずとも

おと　声ヲオトトイヘル

万葉五

後拾遺夏　葉をくらべる　源宗于

ほとゝぎすなにをかたれとしらねども　なきまくしるし

月清　七月　後京極摂政

ほとゝぎすうのはなかつにきりてなき　ものはなくらに　ものをこそおもへ

同同　源師光

ほとゝぎすのはつこえをまちつゝ　ねぬ夜のくらの　やみにこそ　なれ

万代春下　中務親王　昊天

夢たにの　うぐひすのこゑ　なかりせは　ものをとはまし　ほとゝぎす

万代秋上　延長御製

ほとゝぎす　なくこゑきかは　ものをとはまし　ほとゝぎす

千載　源雅光

さらぬだに　ものおもふ　ときの　ほとゝぎす　なくこゑ　きくは　なにとか

千雑中　法性寺入道

谷のうをを　をりてつるうとひとのまつにおとをたてまのくまもある

後葉集　隠岐入道

あしのやまほとゝぎすにはかくまてもたいこをたゝかせおもひさしき

後撰　橘忠房

天ゝにはなきてしらせよほとゝぎす　なにのあたにのこゑをしるらん

○

栗とおふ

大和物語　年月をへて人のあけきをいふつにあるいとほしー○源氏若紫　をさなき人をぬすみ出たりと

をとゝきありしに　後撰　読人不知

後撰　一　流人名知

ほのぬしーの　あのの下葉　風をこそ　人のあけきいあるをひにけり

○濱松三　さくらゆめうまへをもひるひとつてに流さ
きをいるに○源　桐壺

おも　乳母

濱松四　ゆめ〳〵十七八なりける娘のいとをかしけなるも
にをへて○和名抄　○書世集　長家卿

しのちるまきのもしゐ　西行
山家集　名下女をおもひかけるを
いちもとのうゐめをうゑけるかき根をかたらひて
夫木　世名女

万十二
みちのくにのあさかぬまのもしゐ

○

三言

おさつ　瘡

源　若菜　ちいさくなりたるひて○中務内侍日記
てゐるゝおちうせぬ　上にたるゝ　○大鏡序
くるをてあるる日に行つまも

おそひ　扇風ノフチ

業氣　衣珠　清原風も日ゐ　おそひ　ひゐ　ゐ　ゐ

○

おとゝ殿 ○大臣 ○侍女

うゐ川保 ごーうけ おとゝの殿 上のうへゝ〻をけて ○源 朝臣 おん

おとゝとゝ〻せ多し ○ふと ここハ源ノ侍ノ者タルヲイハル ニテ 祖母侍女ノ意ナリ

○ をうつたおとゝとゝ〻 ○挟衣

うぢ殿を名のゝ日多るかたいつゝと 鳥 ふかり

一上四十ス 車ゝ〻せ多るに五十多ゆゝ おとゝの殿

しゝぬ夫ほ一毎る ○同一 下 おとゝ さゝそ 乳母ヲイヘリ ○

おとゝれ 老成人

神中ニ引或物語

紀四のおとゝさのゝ殿見ゝるふあはのあきしのお風ゝらせん

○長受領 オトナ 今昔 七八十一 ○

おとゝ孫 孫子

うゐ川保 菓宴 かゝて后の宴三月廿四日に出ゝるおとゝ孫

にれんつゝまりまる ○同 紀本 ゝゝき 下 大将殿ゐい廿七

日ゝてきゝおとゝ孫ゐれんさゝの陵ゐ 清涼殿ゐゝん ゝ ゝ

る ○

中ノ子 十郎

きゝゝきの子の日 十郎

おつま 人をゝて ゝ ゝ

竹取　天人翁をさそてつふ　かくつるしきおのもうとに　ちそ　ちく

長明集

○業光　ちるまいおのもしのるにとそ　ちまいをてと

のそ　ちるをもしるまて○今昔せ　四十　ちの匂ニ打懸テ此ヲ

得テ着ヨ　ちトイヘハ　○今昔せ七　四十一

おちき

おちきをちきしうきあるはつ又小ちしんはあるは

まるおと後人の所為なく

おちる

中務日侍日記　清ちるちまにとしうきはあるまし

おちまし

源　朝臣　ちたちうにあちましるとのはつふちをいき

ちる　万水　大ちはる　○清松四いとあてにちほとうにあち

まちるまはちる○

御　オホン　御ハスヘテ哥詩ニカキウスヨロツノ所作ニモイフセモト

ハ天皇ノ御身ノウヘニノミカキルヿナルヲ中昔ヨリ時

シテ高臺ノカタ〻
ニオヨホシイ〻リ

源 梅枝 おもかの清て コレハ御薫物ナリ ○同 きいのうへの清て 同上

○同 蓬宴 源氏の君の清をい 清侍 ○同 少女 おもかの

清をいさゝ 源の浮ナリ ○京極保 ミヤウけ 野山をとけても清

をいつゝ清ん コレハ後宴女ノ子ウムヘキ所ナク堀カイフ詞ニテ御産ノコヲハト云ナリ

○業尼 若枝 おほんのいさゝ清をつゝ

ゝさゝに コレハ同葉ニテイヒナフナリ ○夜之女御集

○大和物語 さもしうちの清ゐて○

おほへ 御前○人ニムカヒテカシテイフ例

演松一 河陽縣 后御ゐの三の清ゐにもうゑしのゝ

詞におほへのゝゝゝゝゝのほゝ ゝゝ

に○

おもや 母屋

竹取 おもやのゝゝゝ

○

おやま 御山

主ニ ゝゝ

みのゝゝゝ
ゝゝ御神
ゝゝ
伊勢ノゝゝ

○万代集四　みのちかりる人のむさぼりにわいをを
ちさのいさめをてうへをとをはかりはいつををトりる
実方朝臣
うきめをつきのををるをいみのあさはのかををいさもる
返ーをみ人ををはかる
ちをはかる神しいきをはをつきのをつをるををとをれ
実方集
続後撰　藤原為家
ちををををいのちをのをつをき八百をの代をいかをし
散木集
ちをはのさををちをきに
後撰別　三親王
東海のをのちをのあをにもあをきのををとををはをれ

おをる
中務日侍日記　沙をるの後もをみに行をきはの○同おを
をの後○同ををはをるも○同あをはをきをる沙をる
はをを○増鏡　をのををけ　みををいはををおをををを
○普門五　月をを沙鏡ををををはをを○

下名（カリナ）
江次第四　下名（カリ）書様アリ○紀畧寛弘元正廿五

下名 除目ノ翌日ニ○同寛弘五正廿九下名 同上○万
寿三年十月廿六日除目終即有下名事○江次
第二 叙位下名抄云書叙人姓名下賜二省亜故
曰下名是白馬節會日叙列二省亜以此下名引
四位以下也三位以上不書下名故二省不引○
写源日記 寛弘五年正月廿九日下名 ちかくさまこんかくさまこ
てまいさうのぬ

おろし 今俗人を卑しむ詞 源氏 ちかくさうの出りおろし○同 同 さくみて又ちろ
しめるるものあらうて○同 文禅 おろしあてんかい

四言

おいつ〜 ヲイ〜平部
讃岐日記上おいつ〜とくまきあてこれをおよしの○今昔
世九 庚申オイ〜ト叫ヘト男答ヘモ不為ノ○
落窪
おいつ〜 茅元 ヨフ〜テ
常盤山おいつ〜ゆきこ玉りてきみのきこ四〜校にてきる

八

おいらの

竹取物語 おいらこうにおうらるゝ例あり きそうたいのを

源胡蝶 河海 おいらのたいこいて きそうたいのを

○拾遺頼光中に下同○本居云浴言尋常ニ破ヲ

キルナトイフ尋常ニ近シ

ちきぐち

業元 とものこうの孫の。ちきぐちに ちきせるくち○同 伊賀

白の孫さいう孫のちきぐち○同 伊賀着 ちきぐちらてんなー

○同 初元 三十六 ○ひりの保 為ひろき 西き西のちきぐちの言葉

に

ちきぶゝ 未来記ナリ

難太平記上義家ノ御置文ニ云我七代ノ孫ニ

我生変テ天下ヲ取ベシ○

おいごき 奥書

十六夜日記 冊子ものおいごきれとして○

おさのしら　訓○假字拾遺　証アリ

萍花　根合　えみふもえおさこを　をえ

章之百之雲本　まめてもおさらめ　をめてる日にもおさふあこのたい　をえ　ゆ

印本家集う

おさらめとあり

おさをり　癒

枕十七　ヲに　をむこと　似て　寄ふ人の　中略　おさをり　多をせ

そきえ　をるもうまし○

おーあて

用語集　高上　そのくをて　をてこえて　ゆる　ゆもとたお

あてたつえーゆる○

おーさる

萍花　音乐　よ　ぎき　ヲて　ゆて　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ

に○枕草子　○源氏

おーゆち

源氏　三　冊　北方　おーゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　

濃 桐壺 いとおーあちかとくしき雨をめーそみ洗うに

て○

ちち髪 落髪

拾遺恋一 あきはれくりつまとうちちはのみをれてとめをあるはるる

思ひ之集

おとのうをれてそなへくきて

新六 髪 為家

もとすゑとメはあ西川をまかるあちうみの　をかうに色のうるきもしう

おちくち 俗語ハ津めをめてそのきたに仏を栗口と言ふ

拾遺 物名 くちのくちのをしき

あーー川の山ちかのくちいろのちうくちいろのをーきそあるまをくしる

ちちつき雨

ちちつき 落着

新六 東海のうちはのうちはのちちつきに人心をさとめ天ハ月仏さ

光俊

○濃雪二若君ムをて里ゆそいとき、ちちつきたるる

○うるうるる　ちちりき雨のうはをうまた○小鳴口号中

紀言の多ちつるるる雨ーまれちつきぬ○さーーれ西

山ゆる雨にちちつきうまた

おーーー　名々

小鳴口号 いかるがておりくそ墨をつけ給へ

○遊糸日記 ほかもほかりなまとつゝほうてれん

ゑうにおとあいおりくもと

おげうみ

宇治拾遺一 平家の系

○古事談 僧行渡守ヲミレい首オツカミト云

程ニオヒタル法師之ニ ○義経記 法師髪

ともつ祝にかゝらをそきまいおりうゝかゝらにおひ負る

○今物語十七 法師の ほあとゝあゝけるうかゝら

いおつうみゝもえて

おゝきゝ 清徒之集

おゝきゝにうみゝるもてい あうとともにうゝをもゝ

○

おゝとひ 朴 ○又弟姉妹

今物語 待賢門院の堀川上西門院の兵衛おゝとひかり

ゝゝ ○万 弟日 ○顕宗紀 ○假字

拾遺可考

おもとの花　盤居

業元　うゝそぬ著　有四とつる　信し　うゝせ　ちしてあしさか

させ多いて〜を○

おもとの花

カヒサキ

源氏

拾遺負外

子日ほるたてほの枝重の小松系　うるかにうゆる千世のあしたを

源氏手習巻

山里の高原の子日つゝ今一松あるそきの角井原うゝぶ

○

おほうの子

和名抄

○字鏡

○浪撥意六　をゝ系の面ゝてゝであり〜て面のうゝらお

ほうさをゝ系につゝそ〜ゝ是ゝ○義ゝほ

おほうの鈴　鐘

業元　浪撥大將　伊堂に〜てぬうをつきあほうの鈴をつきて

中のゝゝ義ゝ○和名抄　洪鐘　俗云於保加祢

もほそう

おほそう
オホサリトイフ
ニ近シ

源　女女　もほそうのこつのくちいまてまゐりて侍り　○
同　園屋　もほそうみてうゑ侍り　○同　玉つる　おかそう侍る
いことも　おもしろのぬ　とて　○同　柏木　十二　○同　東屋　六十二　○同
同　八　十五　○同　藤袴　三十九　○ゆり保　多糸君　おほみて　皆をとまい
しそふ侍りに　○同　春日詣　ちいさ大般若　もほ家に多
川　○紫日記　○宣方集九書
うけろふ日記　さらといくそ　もほそう侍り　風にいそつそいそんあるを紅
もほそで　大神

中將日記　伊勢大そその浮袍をとる　○

もほめく
拾遺　いそかと　思ふ　さろのあるきいもほ　ちくそんそうまに　ゆりる
○

おほろけ
業平　浦々別　もほろけの鳥りあるの侍りいそ多んさと
うゑ　○

御方（オンカタ）

源 松風 あかしのうらを地の詞にうたいてい

おもこで 母をもとめていく

宇治保 春の法 うすもすこしこ○曾丹集

おもくもの里（ナニ）

源 後撰 ちぎりのしと高砂道をたどりておもくもの山にふる雨とぞ

○小侍従集 おもくもの里○千雑中 おもくもの城

おとくもの山

おもくもの里

おもくもの城

もとのいで

後伏見院の御法に物ふる古今集跡の家

さのうちに聊ありつるの君のおもてにいとゝ雨ふる心ぢ

○

あるさの国 親様

隆信集 長陽 ミーさろゝ三人ゝ みうちうけをのこゝ あるさ国

に五のうて 祖母に○源 後合 うけたうるる あるさ国に

きちーめさまー○唐衣 ものけの おやま国にそれして

ありうゝ笠えゝ○

もく多ち　身ニとミラ物ヲヲスルヲニイハリ

○源重　もく多ち　ちりあらてさそ花のちれにけるまし
ちるきの つ枝ほ　ほとけ　ひさき
ちりぬ　いとはし

おもしろの

源　後拾　おれ　ちるもまてしう○同　少将　人のもとに
おのりて　おもしろき　ちるとしていてらめもてるをとて
そ　ちるとしは　免て○　オロカノ　ロト　同　ヒ

おれ　ちること

もろし枝

千載春上中院　ちりる　行梅の　もろし枝　つえさしに
ちりるを

新六

文永　梅

○頼政集　宝荘厳院　ちりて　ゆく梅を　と　ゆて　秋
の静　賢に　もろし枝を　ちるに　つえ　ちるに　ちるを
えもろし　の春　多くと　ヤ　ちる　逆事に　なる

五言

御家様（ゴイヘヤウ）

蹇驢嘶餘云世尊寺清水谷ハ能書ノ家也是ヲ家様ト云也日院様ヨリ後円融院家様ヲアリハシ改テ勅筆ガリヲイカニモ風流ニアリシ出シ諸家ニ学ヒトアリ

おきゆかまし　前言　河海

源　うけろう　いけうのうかう　おきゆかしたくさをりて○

おくるか　今後也

源　園屋　おくるうきさに　あてゆかしくあるまじく○

おきゆかく　おそゆかく　おそゆかくの結元。おきゆかくの詠ゝ

景元　衣珠　保たうてあるまたにおきゆかくうゆかくあり

○源　東屋　えのつみせたるをあるにおきゆかくあて　鈍人○

同　同　えのめもとおそあそゆかくあり○同　清舟　おきゆかくあり

いうつきたるを思ひたるか○同　きさ　保のたるを

ちるくゆかたにかくおそゆかくいとゆきちきうふかくとも

多えてゆかく見○

おきゆかくきく人　おそうるくきう

おしいる

中暫日記 えみちうの初めおしいる

おしくみ 子ヲツクメルムツキナドカ

金葉雜下 古歌に云るを捨て行りりの可くみに云きつけは

ちりなるこの○

おもちくて 堆凝○人のあたゝかなこと多くて

業光 月宴 五十七 おしちくて うゆあるして○

ちちあふる

源 袁浮橋 いとかくはてちちあふるきくとゝ思ひ見さし

を○源 玉かつら おとゝあふる○源 蓬生 心姫君の母北の

方、世にちちあふまして○今昔 世一 五 落フレタル尊ノ

子共ノ為方无リ不合ナル落アフレノアヲヨ畧セルナリ

夫木世六 後鳥羽

あはれかる己れのおくうに日形へてちちあふまぬつき月をいたせん

散木集 恨ヲ恥運

年ふまいりかきみをもちふれて世をあはれとけぬいとはしの月や

○

おとゝ おく 陰置

源 義清 おとーつき 久至ーれのにて ○同 玉ゑ お

ミーあふさに ○同 あけすき きてかへる おとーつきとゑ久

○

おとーゑ 落髪

遊糸日記 そんとゑの記ゑ ゑ ゑ ゑ ゑ

○

おれーこと

業氏 楚王 義 おれーきてをそなへ いとまきれる

おのこゑ 夫婦の中をいふ

後撰 恋五 笛 弁のことゑ ふる物 かなるとも あふさゑ あい れ れ

○伊物 おのこゑにかはりまこと ミゑ ○

おふふ〜 知頭 ツ ア フ ナ ト ン 冬ノ アヒ ア フ 言

伊物

○源 竹川 れふふ れ 少 まんと 思いて 寿

高 れ ○源 高木 ふ ふ れ ふ ふ ふ ふ

手経 ふひ ゑる こと ○朗 詠 菅絃 隨分 菅絃 還 自足 等

十九

閑居詠被人知○孫　太政大將氏郎々ゆとのおふ
かくこうけうきくを○三部抄言釈下十四ウ

もほえやま
業兼　浦々別
うき事をもほえの山とそかくいとふもしらぬ人の

○宝物集

あほかーら
業兼　きるいもーとれんくせ
あほかーらゆとつもて係のあそ
ろーけにそちふきうみうけてさはうにうえーー

て是をる馬にのりてもしたんくあて宣をとうあほとも
かーー御供ノ行列○讃岐日記十二月彩日　ゆ係
のやかうほうみもそくめうとも大かーらゆと是てうい
ーあるうるし業ぶ　ちちをほうあのるい世俗ゆとみ
るほしそのかうまうあい　いうにをを　えて門出をう
ーさきーー

あほつみ　大敵
業兼　うの面　かくの声あほつみのおーきに六種に大地
しうのきめーー

[illegible] 大御堂

中務日侍日記 大御堂の[illegible]に○源親行関

東記行云大御堂しきさいなる[illegible]○

[illegible] 生次

源 少少

[illegible] 面隠

百代々 定頼

行幸のち[illegible]

[illegible] 自讃家の言葉 面目ある家の言葉

長明無名抄上 さいもをもして[illegible]と男人[illegible]○同上

○同下 二カ ○

[illegible] 面々○後拾メシトイフ言葉

清輝六集 [illegible]

頼実集 [illegible]

六帖 松山 [illegible]

おもふて

長明無名抄　下知識に係る事の例

例さもとおもふて

おもふらさ

拾遺負外

こしかりこたうとなしカニナシテヨメリ

うりし尾花うゑめ吟西行の荒のもりさき

おもふ

大和物語　おもふ死

おもふ

おもふ

おもふ

おものちり

後拾遺賀　義孝保言朝臣

うゝ〜のあるゝ　ちゝ　あるゝ　ちゝ　ちゝ　ちゝ　ちゝ　ちゝ　ちゝ　ちゝ　ちゝ

拾遺雜下　あんの女

あるゝのあるゝと思ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ

○中將日侍日記　ふ内のおもとに　ふのあるゝ　ひと

へきくのふ　ふ○

おくそく人

後撰雜四　忠房

君ゝ名のをりの　ふゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

拾遺雜二

○

六言

おい〜〜〜〜　老々

業氣　月宴　卅二　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ

ういにふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ○

いゝき　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ

ふのつ　ふ本

六帖　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ

○菅家文草

おいのつゝ
源 関屋 おいのつゝあるゝ所うのゝして○同 ゝより
つゝおいのつゝゝふて○

おいのふゝろ
保憲女集 おいのふゝろにあるして○

おさゝふみ 急状○あるゝ流文ゝ
長明無名抄上 ゝまあゝ人ゝ多ゝゝゝゝと思ゝ

ゝゝに所ゝてゝゝ○紀略二延長八年三月二
日渤海存問使裴璆進急状○梅窓筆記載 傳
宣章 宣旨返給急状於外記状権右中弁兼継
朝臣進急状事仰亘微将来返賜右宣旨可被下
知之状如件文保二年十月六日春宮太夫判○
宇治拾遺

おさへらまて さゝけらまこと
隆信集詞 五位二下さゝゝゝゝゝゝらまて所ゝの事と
おゝて後○

[illegible]

[illegible]（後拾遺四 和泉式部）に[illegible]

○新撰和歌集（夫木廿六 後成）[illegible]

○源（東屋）[illegible]

[illegible]（夫木 西行）[illegible]

○

おそくりの衣　春画○今俗[illegible]

著聞集佐渡国[illegible]

[illegible]

[illegible]

おちくぼの衣（後撰）

○落書[illegible]序　[illegible]

[illegible]（襲をい）

おとのあうり

茅元 音元 うるほよに移ふ多けゆあほしめておと

のあうりな ○同 同 えんおとのあうりぬ ○

おとうの人 茅元 おとうるる人

長明無名抄下 ゆをゆうもおとうの人ふとしいまるひ

やはら〳〵○

おはしぐちに

茅元 うの思 ちれしらあいふつき形移た ○

あほさけ人 官人

竹取 さらのあほさけ人ふ立て うう ○添 初音 あほ

さけ人にしかしてんとあん思ひあきこし ○

あほさけた〳〵

玉小櫛 おのう多ふあいうぬ人のう人ふ事を多ふ〳〵

う見ゆてう〳〵思ふとこいあほさけ俗めい

やーき言に多ふあつうぬ人の上の事に妬ひを法及

[illegible]きと云 清家の意にあらまし ○ 源 幕木 とゝいあ
つれ〳〵ものがたりとかの物語なるべし
ものがたりを ○ 枕草紙 十ノ段もしきあ わき侍うらが
ゝけたる〳〵ものてくんそくのもしらうきうるへりまと方
の上ものていつものらるきをうひもぬを ○ 紫式部日
記をろにんさほしうあほゝけたるとうらがぬんの深
ゝにみくらそうひまへらましう ○ 栄花 こたそ必要
りみくものがたりあるましる

ものがたりの

狭衣 二上 四十 ものがたりにかゝりて酒肴をそなへ
るを ハツメクシモ ハヽウラシ ○ 源 松四 ものがたりうけしう侍まし
て ○

ものがたりをそ
百十四 廿八
可良須等布於保乎曽柿里能麻尤低乎毛伎麻
尤奴伎美乎許呂久等曽奈久 ○ 異記中 三条
大憶詠曰加良須等伊布於保乎蘇等利能去等
乎美天等毋迩等伊比天尤岐陀智伊奴留 ○

ヲワロ 子部

おとてふせ

おとておもい

仲文集
あうほうけ彩くしはらくのおとてなけいあめくせん
後撰巻下

○源蓬生　おとてふせにおほしあるしえて○

おとのくそう

中務内侍日記　二位の道方清とのさうのそうとぶ

とくのうるる彩ふて○

某のおもんかた

年のおもんん
年のあるも
雲のおもんん
床のおもんん
山のくのおもんん
ちくさのちろ
月のみるん

古今
仮をして身のいたつにおもんん年ふもんんとも
六帖
くまもおとろしる年のもろもをうくくくくを君ちにかつる
同　名をしもあるとをせ一こるの雪のそんふもをかう
万代集　八条院言葉
つくり月年のもをんふをくくくををくくくを
林葉集
君ちにかつ園ちいしをのつる赤のそんともをかい
拾遺愚草上
山のくのちそんともをかうくをくほの妹ちの秋
家菱集
ゆきくるるふくくくのちろをつかくふのにもをくを
文木十八　歌書
源復ナ
いかくのをにおれも西をいかん身のみをんともをかう

（そをふーき古本）

おとそあり

ちはやぶるひとのさとに祝しけんこゝろきるめにゝ神をしてし

○大和 同

○古意可考

七言

おしのけらく

散木 いそのかみふるの山のめをつゝみ所のけられてゐる さろホ

万代雑三

文木卅三

○

おしのけらく

業氏 楚王 爰 かくらに人のゐるものとおもふとのいふ

とのほうたんつきかく○

おとゝしのけゞ

業氏 月宴 おとゝしのけゞとゝいふをして○

おとそにゆくる おとそにのけるとゝいふきり○記ヲノコレメル也

長明無名抄 名あるものをもしらぬあるてに

[illegible]事[illegible]○

おうてをあつめ　赤面

業苑　衣珠　[illegible]

○おうてをあつめて○

[illegible]

後撰雜三

[illegible]

千載上　後拾

[illegible]

紫集

[illegible]

○源　あけぼの

茂万

[illegible]

○後拾四　[illegible]

[illegible]

○[illegible]

八言

おのれ[illegible]のおと　自然之事

続世継　[illegible]

[illegible]

○[illegible]

[illegible]

後撰雑二 ちはやぶる
一ふりにうるみなれそそこなれの さゝのうらにも なをふるるを
金葉恋下 題不知 ちはやぶる
かゝる所山のかけにまもれもあるまるあり

○伊勢集 同 ○六帖 初句 ちはやぶる

万代春下 聖武御製
世はなれの人のえさはきわかもとゝ花のをりえさ こゝろあり
同恋一
ちはやぶる山のかけらに住あれこの宿るまい なるまるあり
小馬命婦集
ちはやぶる ゆくまとこんぬとこふさるを
六帖 手へていふ
東路のさゝの 新橋 ちはやぶるかんあり つゆもはきみ

○遊糸日記

九言

ちはやけうきこゝろのとも
源 少女 ちはやぶるかみもいとゝもあれえぬ 腰痛気のつ
○ ちはやけうきこゝろ

ちはやけうきこゝろ
業元 ちはやぶるのうちの三 先帝の御時 ちはやけうきつゝみ
一たてのうまとこ女ぶきとあるといとくまとも
おいしにはせるのてて高内侍ゝそゝ云 后ニミヤツカヘスルニ
ハアラテ帝ニツカフルヲオホヤケトイフニヤ 儒例可考 ○源浮舟
ちはやけうきこゝろ

十二言

おほうみのそこもちくらうの　海色を七くさの宝と

菊花　くさ〳〵後つか　四オ　○同　月宴　四十四オ　○同　若枝　十一　○初花　四十三ウ

○枕草子

為忠後百　弘長

恋いおほうみのもの腰ぬいとのいうらのうへしたをもて〳〵

久安百首　小大進

ひさしもさいうらうえもの上をのそなたにをくいあちをもりもも

○